

氏名	小曾根 秀実 (Hidemi Ozone)		
学位の種類	博士 (心身健康科学)		
学位記番号	甲第 16 号		
学位授与年月日	平成 25 年 9 月 22 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文題目	乳幼児に直接授乳する母親の心身健康に関する研究 Physical and psychological well-being of a mother suckling her infant at her breast		
研究指導教員	教授 近藤 昊		
論文審査委員	主査 教授 青木 清	副査 教授 島田 凉子	
	副査 教授 中野 博子	副査 教授 久住 武	

博士学位論文内容の要旨

小曾根秀実の博士学位論文は緒言、研究方法、結果、考察、結論の 5 つの部分から成る。

緒言では、母親が乳幼児に授乳することについて、「授乳過程の中で、直接授乳者の授乳最中期は心身状態を最も前向きにさせる」という仮説を立証することを述べている。そして、授乳者が直接授乳を通して乳幼児との関係を認識し、授乳を中心とした育児が母親自身の幸福感に結びつくことを明らかにするために、研究 1 として観察型研究、研究 2 として授乳者から唾液中クロモグラニン A (CgA) を採取して生化学的に測定したことが述べられている。

対象は、研究 1 では A 県在住の生後 2 ヶ月から 2 歳までの乳幼児をもつ授乳者 (直接授乳者、混合授乳者、間接授乳者) 262 人であり、研究 2 では生後 2 ヶ月から生後 6 ヶ月までの乳幼児をもつ直接授乳者 25 人であった。この研究は、X 大学と本学の倫理審査委員会の承認のもとに行った。

結果の項目では、研究 1 において、262 人について授乳者の心身健康に影響を与える前向きな要因について統計解析を行った。その結果、「直接授乳を行っている」「困った時に話を聴いてくれる人や場所がある」「抵抗感なく授乳できる」の 3 つが抽出されたこと、心身の状態については、直接授乳者群は間接授乳者群よりも有意に高いことを示した。研究 2 では、唾液中 CgA の測定を直接授乳者群と間接授乳者群それぞれで行ったが、両者間に有意な差はみられなかった。したがって、今後の研究課題となった。しかしながら、研究 1 で明らかになったように、直接授乳者においては、授乳最中期の心身状態の合計得点が有意に高いことが認められ、直接授乳が心身への影響をもたらすことを表した。

考察として、直接授乳者が間接授乳者よりも心身状態がきわめて良好な状態にあることを証明できたのは、直接授乳者にとって授乳最中期は、乳幼児の口腔が乳房に直接接触した時の刺激、接触刺激、呼吸刺激、温度刺激などが母親の乳房周辺の感覚受容体を刺激し、それが母親にとっては心的に歓喜や至福を導く体験となり、直接授乳ごとにもたらされる好循環となっていると推察されたことを述べている。

結論として、研究対象者である授乳者の心身状態に直接影響をもたらす要因は、乳幼児に直接授乳を行っていること、育児に関して困った時に話を聴いてくれる人や場所があること、そして好環境にあつて抵抗感なく授乳できることの 3 点であることを明らかにした。つまりこの 3 点を満たしていることが重要であり、直接授乳者が間接授乳者よりも心身の健康状態が良好である条件になっているとも言える。しかしながら、生化学的に測定する CgA についての研究は今後の課題であるとしている。

博士学位論文審査結果の要旨

小曾根秀実の博士学位論文は、「乳幼児に直接授乳する母親の心身健康に関する研究」の題で、母親である授乳者の乳幼児に対しての授乳が直接授乳であるか、間接授乳であるか、混合授乳であるかによって母親の心身状態に関する量的調査研究を行うとともに、直接授乳者に対して授乳後直ちに唾液中 CgA を採取して生化学的な測定を行った。その研究目的は、授乳者が乳幼児に対して

授乳した時に、母親の心身状態にどのような影響をもたらすかを明らかにすることである。これまでに、世界保健機関（WHO）をはじめ、各医療機関で乳幼児に対する直接授乳が勧められているが、その理由のひとつとして、授乳者である母親の授乳時の心身状態についてこれまで科学的に明らかにした研究例はみられないことから本研究が計画された。この研究はX大学と本学の倫理審査委員会の承認を得て行ったものである。対象者は授乳者であり、直接授乳者、間接授乳者、混合授乳者の三群に分けてA県の262名に対して無記名の自記式質問紙を配布し、心身状態について調査した。授乳者の心身健康に影響を与える前向きな要因を検討するために、研究1と研究2を実施した。両研究から、心身健康状態は直接授乳者が間接授乳者よりも良好であること、直接授乳者では授乳最中期が有意に高いことを明らかにした。これらは、授乳者にとって授乳最中期は乳幼児の口腔が乳房に直接接触した時の感覚刺激が持続されることから、脳内の情動系神経回路や領域に伝達され、それによって歓喜や至福といった感情を持続できたことに依ると推察されると記述している。

小曾根は、結論として、授乳者の心身状態に直接影響を与える前向きな要因は直接授乳を行った結果であると報告している。そして、それが母親である授乳者に心身状態の安定性をもたらすことが明らかにできたと述べている。また、育児に困った時に話を聴いてくれる人や場所があること、そして抵抗感なく授乳できていることの重要性も指摘している。

口答試問では、以上のような研究の内容について約45分間にわたり発表し、その後、各審査委員から研究の内容に関して各種の質問とコメントがあった。それに対する応答が行われたが、論文内容について修正すべき点があり、各審査委員からの指摘にもとづいて修正し再提出するよう要求があった。小曾根がこれらの指摘に答えて修正を行い論文を再提出した。その後審査委員会の各委員は修正された論文について再読し審議した。その結果、申請者は専攻分野について自立して研究を行うことができると判断されるとともに、本研究内容に独創性があること、心身健康科学の分野に貢献するものであることが認められ、全会一致で合格と判定した。

以上のように、小曾根の研究は乳幼児の母親である授乳者の心身健康科学について新しい研究方法を示すものであり、社会における乳幼児に対する育児の参考となるものである。したがって、小曾根秀実の論文は心身健康科学の学位（博士）に値するものである。また、小曾根は公開発表会（約30名参加）において研究成果を発表し、評価を得て合格と判定された。今後、研究者として自立するに十分な研究成果であると判断された。